



金子勉著『大学理念と大学改革 : ドイツと日本』

竺沙, 知章

(Citation)

研究論叢, 22:67-68

(Issue Date)

2016-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009548>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009548>



金子 勉 著

『大学理念と大学改革——ドイツと日本』

竺沙 知章 (京都教育大学)

本書は、2011年9月に46歳という若さで急逝した金子勉氏の遺著である。金子氏は、京都大学大学院教育学研究科教育行政学専攻の博士課程を修了後、広島大学大学教育研究センター助手、大阪教育大学教育学部講師、助教授を歴任したのち、2003年から京都大学教育学部助教授、准教授として活躍され、将来の活躍が大いに期待されていた中堅研究者であった。

金子氏は、大学、高等教育に関する研究を専門としており、ドイツと日本を主たる対象として、歴史的研究や今日の改革動向を分析する優れた論文を数多く残している。これらを埋もれさせることなく、その業績を世に問うことにより、金子氏の研究者としての仕事を後世に残しておきたいと考え、有志の会をつくり、刊行を決断した次第である。

本書の構成は、以下の通りである。

第1部 大学理念の再検討

第1章 大学論の原点—フンボルト理念の再検討

第2章 ドイツにおける近代大学理念の形成過程

図書紹介 潮木守一著『フンボルト理念の終焉? 現代大学の新次元』

第2部 ドイツにおける大学改革

第3章 ドイツにおける大学の組織原理と実態

第1節 ドイツの大学における意思決定機関の構成原理

第2節 ドイツの大学における管理一元化の理論的課題

第3節 ドイツ高等教育立法の政治分析

第4節 ドイツにおける大学職員

第4章 ドイツにおける大学改革の動向

第1節 大学ガバナンスの主体の構成原理—ドイツ・モデルの現在

第2節 ドイツにおける国立財団型大学の成立

第3節 ドイツにおける国立大学法人化の新動向

第4節 ドイツの大学における組織改革と財政自治

第5章 ドイツにおける大学の質保証の展開

第1節 ドイツにおける大学教授学の展開

第2節 ドイツにおける学位改革の進展

第3節 高等教育機関の評価—ドイツ編
書 評 ウルリッヒ・タイヒラー著、馬越徹・吉川裕美子監訳『ヨーロッパの高等教育改革』

第3部 日本における大学改革

第6章 大学の法的地位と組織改革

第1節 明治期大学独立論からの示唆

第2節 国立大学大学院における独立研究科の設置状況

第3節 国立大学の独立行政法人化と再編・統合

第4節 大学のガバナンス—光華女子大学での講演

第7章 教員養成史と大学の役割

第1節 無試験検定制度許可学校方式における認可過程—「漢文科」の場合

第2節 新制大学の展開と教育学部

第8章 学部教育改革の課題

第1節 大学入学までの学習の状況

第2節 秋季入学の歴史と政策の展開

第3節 教養的教育と専門的教育—カリキュラム改革は成功したか

書 評 鳥居朋子著『戦後初期における

大学改革構想の研究』

解題

以上のように、本書は、金子氏の大学、高等教育に関する論文、教員養成史に関する論文、そして光華女子大学での講演録を収録し、体系性を考えて編集し、まとめたものである。明らかな誤字、脱字は修正したが、文章には一切手を加えていない。第1章、第2章、第3章以下の各節のタイトルは、ごく一部を除き原論文のタイトルそのままであり、書名、部、第3章以下の各章のタイトルは、有志の会で議論をして設定したものである。

第1部は、フンボルト理念を再検討し、ドイツにおける近代大学理念の成立過程を解明しようとする学術性の高い論文である。原点にあたり、独自の視角による精緻な分析に基づいて実証しており、金子氏のライフワークになる研究の端緒であったと思われる。研究室には多くの資料が残されており、金子氏は次の論文の構想も描いていたことであろう。

第2部は、ドイツの大学改革に関わる諸論を収めている。第3章は大学の管理運営に関わる組織原理、第4章は大学の設置形態も含めた組織改革の動向、第5章は大学の質保証に関わる改革動向を対象とした諸論によって構成している。第3章第1節は卒業論文、第3章第2節は修士論文によるものであり、金子氏の研究の原点である。

第3部は、日本の大学に関する諸論を収めている。第6章は、国立大学の法人化に関わり、大学の法的地位やその改革に関わる諸論、大学のガバナンスに関する講演録、第7章は、教員養成史と大学の役割に関する諸論、第8章は、学部教育の改革に関する諸論によって構成している。

また解題として執筆された諸論文は、金子氏にゆかりのある方々によるもので、金子氏が理事を務めていた関西教育行政学会におい

て、急逝されたのちに、その遺志を受け継ぐために、月例会でその業績を検討し、その成果をまとめた紀要『教育行財政研究』の特集論文を再掲したものである。木岡一明氏による解題は、TEES研究会での金子氏の業績について論じたものである。

金子氏の業績には、確かな問題意識に基づいていることから、一本筋の通った一貫性を見ることができる。依頼原稿も少なくなかったと思われるが、そのような原稿の執筆であっても、しっかりと構想を練り、格調高い文章で優れた論考にまとめ上げている。それ故に、世間一般の論調に流されることがなく、独自の分析視角、問題提起が示されており、知的刺激に満ちている。したがって、個別に執筆された論文を一つにまとめても、互いに矛盾したり、齟齬が生じたりすることなく、論文の寄せ集めであっても単著としての体系性を生み出すことになっている。

校正の段階で本人に確認してみたいと感じることが幾度となくあった。最も気になったのは、訳語の不統一である。おそらく最も近年の論文の訳語に統一されるのが適切だと思うが、本書ではあえてそのままにしている。当初は原語カタカナ表記であったのが、後の論文では日本語訳により表記されているものがいくつかある。そこに、時間をかけて適切な訳語を見出す研究姿勢を見ることがができる。

本書は、とりわけ第1部は、今日の混迷した大学の状況を考えると、きわめて重要な問題提起をしていると言える。そして何よりも、金子氏の研究スタイル、論文執筆の姿勢そのものが、大学や学問研究の意義を示している。我々は、本書から多くのことを学ぶことができる。

(東信堂刊 2015年5月発行 本体価格4200円)